

一言の重さ

「お前は身体が小さいが、心も小さかったな」

札幌市内の中学校の某教師（M教師）は、終業式の折、1学年の生徒達が揃っているところで、進級する子ども達一人ひとりに声を掛けたそうです。

教師にとっては、卒業式や終業式のように生徒とのお別れをする時というのは、子ども達に自分の思いを伝える上で大変大事な、そして絶好の機会といえます。それだけに教師の皆さんは、子ども達に贈る言葉の一言一言に心血を注いでいるはずです。

その大事な場面で、件のM教師が1人の男子生徒（A君）に対して投げかけた言葉、それが冒頭の一言です。

実は、A君は私の知人の息子で、その子のことは、小さい頃から私も良く知っています。空手を習ったりして身体はがっちりしているのですが、背が低くて、恐らくクラスでは一番小さいのではないかと思います。性格はひょうきんな面があり、友達ともよく遊んでいます。ですから、M教師が「お前は身体が小さい」というのはその通りですが、心根のことは、他の子と特別変わったところがあるようには思えません。

勿論A君も今時の子どもですから、学校では、先生のいう事を聞かなかったり、逆に、本人は背が低いことをコンプレックスに感じていたようですから、その為に周りとのコミュニケーションがうまく取れなかったという面があったのかも知れません。しかし、仮にもA君にそうしたネガティブな要素があったとしたら、それを克服するよう仕向けていくのが教師の役割ではないでしょうか。

背が低いことにコンプレックスを感じている少年に対して、教師がダメを押すように「心まで小さい」といって憚らない感性を私は疑います。一体、M教師はA君に何を伝えようとしたのでしょうか。

もしかしたらA君を発奮させようとしたのかも知れませんが、私には、ただA君を切り捨てただけのようにしか感じられません。M教師から「お前は身体が小さいが、心も小さかったな」といわれたA君は、流石にしばらく落ち込ん

でいたそうですが、無理もありません。

逆に、A君がM教師から「お前は、身体は小さいがすごい頑張りやだから、もっと大きな心でものを見ろ」とか、「こんな良いところがあるんだから、もっと自分に自信を持て」等といわれたとしたらどうだったでしょう。少なくとも、落ち込むことはなかったことでしょう。

よく、「先生の一言が私の人生を変えた」とか、「先生の一言があったから、今の自分がある」といった話を聞きます。言葉には、よくも悪くも、人の一生を変えてしまう程の大きな力があるということです。

だからこそ、教師の皆さんには、子ども達の心の畑に種を蒔くように、言葉の種を蒔いてあげて欲しいと思います。直ぐには花は咲かないかもしれませんが、その子が大人になった時、「あの時先生がいていた事はこういう事だったのか」と思い出し、その子の人生の支えになる、そんな言葉を贈れたら最高ではないでしょうか。(塾頭 吉田 洋一)